

# 愛犬・愛猫を恐ろしい伝染病から守ろう!

～ワクチンは薬ではありません～

ワクチン接種は感染力の強い伝染病を予防する為に必要なものです。  
弱めた病原体を接種して犬や猫に免疫を作ります。



～混合ワクチンで予防できる病気～



病名	症状
1. 犬ジステンパー	高熱・目ヤニ・鼻水・食欲不振・嘔吐や下痢など
2. 犬パルボウイルス感染症	激しい嘔吐・蹴り・食欲不振・急激な衰弱など
3. 犬伝染性肝炎	発熱・腹痛・嘔吐・蹴り・眼が白く濁る・子犬の突然死など
4. 犬アデノウイルス2型感染症	発熱・食欲不振・くしゃみ・鼻水・短く乾いた咳・肺炎など
5. 犬パラインフルエンザウイルス感染症	風邪の症状がみられる・咳・鼻水・扁桃炎など
6. 犬コロナウイルス感染症	成犬の場合…軽度の胃腸炎 子犬の場合…嘔吐と重度の水溶性下痢など
7. 犬レプトスピラ感染症 コペンハーゲン型	発熱・黄疸・歯ぐきの出血もみられる重症型など
8. カニコラ型	高熱・嘔吐・下痢・脱水症状など
9. ヘブドマディス型	腎炎・肝炎など

6種 (rows 1-6)  
8種 (rows 7-8)  
9種 (rows 7-9)

死亡率が高い!  
死亡率が高い!  
人畜共通感染症! 死亡率が高い!



病名	症状
1. 猫ウイルス性鼻気肝炎	激しいクシャミ・咳・鼻水・目ヤニ・高熱・食欲不振など
2. 猫カリシウイルス感染症	クシャミ・鼻水・発熱・口の中や舌に水疱や潰瘍が出来る事もあるなど
3. 猫汎白血球減少症	高熱・嘔吐・食欲不振・下痢・脱水症状など
4. 猫白血球ウイルス感染症	白血球・リンパ内腫・貧血・流産・体重の減少・発熱・鼻水・脱水・下痢など

3種 (rows 1-3)  
4種 (rows 1-4)

～狂犬病の予防は飼い主様の義務です～

飼主様には狂犬病予防法で狂犬病ワクチン接種が義務づけられています。  
生後91日以上の子犬は飼い始めてから30日に1回、その後は毎年1回注射を受けなければなりません。

当院では2回目のワクチン接種にレプトスピラ症も予防できる8種以上の混合ワクチンをお勧めしています。  
また、狂犬病ワクチンと混合ワクチンは2週間間隔をあけて接種しましょう!!




## ～ワクチンを何回も打つ理由～

子犬、子猫は、母親からもらった免疫(移行抗体)が切れる時期を見計らって接種することが大変重要です。母親からもらった免疫が残っているとワクチンの効果がありません。ワクチンの切れる時期は2ヶ月齢前後なので、数回に分けて打つ必要があります。また、この時期にワクチンを何回か接種することで より強い免疫とより長い免疫力をつけることができます。



## ～ワクチンスケジュール(基本)～

### PUPPY 子犬

	パターン1	パターン2
生後2か月前後	6種混合ワクチン	6種混合ワクチン
生後3ヶ月前後	6種混合ワクチン	8種混合ワクチン
生後4か月前後	2種混合ワクチン	8種混合ワクチン
最終ワクチン接種 1週間後	 いよいよ散歩デビュー!!	
毎年1回ワクチン接種 1度接種したワクチンの免疫力は1年程度で切れてしまいます。 毎年忘れずに追加接種を受けることをお勧めします。		

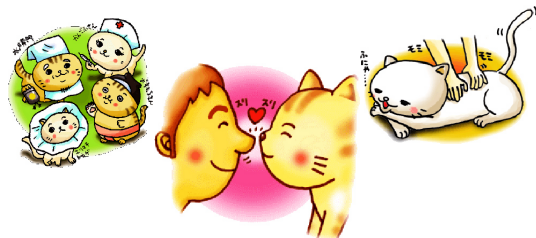


### 社会化期

子供の頃は、いろいろなものに慣れさせる大切な時期です。しかし、感染している犬、その排泄物に接触し病気に感染してしまう恐れがあります。抱っこをして散歩に出掛けましょう☆

### KITTEN 子猫

生後2ヶ月前後	3種または4種混合ワクチン接種
生後3ヶ月前後	3種または4種混合ワクチン接種
毎年1回ワクチン接種	



## ～ワクチンを受けた日の注意～



ワクチン接種後、まれに一過性の副反応がみられることがあります。接種後、しばらくの間はよく様子を見て下さい。また当日及び数日間には安静に過ごして下さい。